

会員建築作品紹介

思い出の住宅

川崎支部 (有) 上原建築設計事務所 上原 伸一

私が以前勤めていた事務所（芦原建築設計研究所）を退職し自分で事務所を開設してから26年が経過しましたが、この間思い出に残るものとして、事務所開設当時に設計した私の実家があります。仕事が無いときに、今思えばゆったりとした時間の中で一人でまとめ上げた貴重な経験でした。今も大切に使われているお茶室のあるこの住宅を、3年ほど前、日事連の「Argus-eye」の「しつらい」特集で案内させていただきましたので、今回改めてこのときの原稿で思い出の住宅を紹介させていただきます。



建物全景

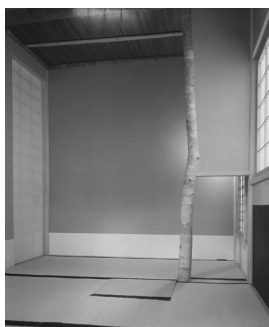
『現代「室礼」考』

床の間には、本床、蹴込床、踏込床、室床、洞床、袋床、釣床、置床、織部床、琵琶床など様々な形があります。また、茶室には炉の切り方により8形式「8炉」があります。向切、偶炉、台目切、四畳半 という4つの炉の切り方があり、それぞれに手前畳の右側に客畳を置く本勝手と手前畳の左側に客畳を置く逆勝手があります。そして、この「8炉」と床の間は密接な関係があり、亭主が座ったときに向かい合う場合を上座床、亭主の後方にある場合を下座床と言いますが、何々好みと伝わっている茶室はすべてこの「8炉」と床の間の位置により分類されています。



和室・床の間（広間）

私が事務所を開設した頃、茶道を教えている母から、広間と小間の茶室がある住宅の設計の依頼を受けました。家元や宗匠など専門家が使う茶室とは違い、普通の生活の場として使用する中での趣味の間としての茶室ですが、こだわりを持った茶室として計画しました。広間は、八畳の



茶室（小間）

茶室で、床の間は表千家の“不審庵”を写したもので本床と琵琶床が上座床に位置しています。小間は、三畳台目切りの茶室で下座床です。それぞれ、広間あるいは小間の景色にあった床の間をしつらえた訳ですが、この家にはもう一つの床があります。この家の玄関は、普通にお客様をお迎えする玄関でもあります。茶室を持った住宅の玄関としての「しつらい」として、織部床を設けました。設けましたと言っても、織部床は、千利休の弟子古田織部好みの床の間で、天井回縁の下に15cm～20cmの杉柂幕板を設け、幕板上部に竹釘を打ち掛軸を掛ける床の間で、床框、地板がないのでスペースの必要が無いという、住宅にはもってこいの「しつらい」なのです。

この家の玄関は、二坪ほどの大きさのごくふつうの玄関ではありますが、茶のお客様をお迎えするという役目も担っていますので、それなりの数奇屋風の雰囲気を出しています。小間の連子窓、風呂先窓が面したアプローチを通り木製の格子戸を開けると、玄昌石のたたきに花崗岩の地覆、檜の式台に畳敷きの玄関となります。そこには、玄関框、下足舞良戸、錆竹、京壁に敷目天井などの和風アイテムの中で、正面のお客様と対峙する位置に織部床が設けられています。竹釘に掛けられた軸は、ウォールウォッシャーの照明に照らし出され、この空間を引き締めています。



玄関ホール

母は、今も元気に茶を続けています。正月の初釜から始まり、いろいろなお茶席や仲間達のお祝い時にはこの家の3つの床の間を最大限生かし、それぞれ手持ちの軸や花でしつらえています。琵琶床を持った広間の床の間は、やはり多くのお客様の目にも触れる所として、あるいは茶のお手前やお茶会での作法の一部として活用されています。小間の床の間は、本当にお茶を楽しむ場として、背景としての床の間となっています。そして玄関の床の間（織部床）は、お客様をもてなすために狭い空間の中で工夫を凝らし遊び心を持った「しつらい」として、この家の中で一番重宝され光輝いた場となっています。



今年の初釜（小間）